

【「福島現状」現地取材レポート】



2011年7月18日

日本マネジメント総合研究所 理事長 戸村智憲

今般の東日本大震災で被災された方々のご安全と1日も早い健全で実りある復旧復興と共に、ご無念の内に天上に召された方々のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

震災直後の東北被災企業さまへの緊急取材に続き、今回は震災・原発で悩む福島に取材で訪れた。現地の今、現地の生の声を、ストレートにお届けしたい。

・誰もいない公園に子供たちの歓声の残像がゆらめく

今回の取材に協力してくれた一般家庭の方は、家の目の前に公園がある。またがって遊ぶパンダの人形やすべり台・ジャングルジム・砂場など、普段ならセミの鳴き声がにぎやかな中で子供たちが遊び、歓声が響いていたことだろう。

だが、3・11以降のこの公園には、表土の放射線量が高いため、誰も近づけない状態だ。この取材に協力してくれている方の家では、表土が窓から入らないように窓は閉め切られている。また、節電対応のため、エアコンはフルに使えず、私も汗をぬぐいながら、かなり室温の高い中で、生の声に耳を傾けている。

このお宅の周辺ではマスクをしている人は少なめだ。しかし、ここから歩いて7分ほどのところは、いわゆる、ホットスポットとして、高い放射線量が検出され、町中の多くの方々がマスクをして気をもんでいる。

・震災の影響

地震自体の影響は、比較的少なめだったとはいえ、取材先のお宅の周辺地域では、瓦屋根の住宅には瓦が落ちたためブルーシートがかかっている家が多く、商店のガラス戸は、震災で割れたガラスを仮止めするテープがばんそうこうのように痛々しくはられている。

福島では以前から震度3～4の地震は多かったという。しかし、この取材先周辺のご年配者様も、「このあたりは小さな地震はしょっちゅう。でも、大きな地震はこないもの」という長年の思い込みがあったと語ってくれた。

・福島から出るも苦しく、残るも苦しい現状

中には、仕事を得られた人々は福島から去っている。特に、放射線の影響を受けやすいとされる子供さんのいらっしゃるご家庭は、安全な環境を求めて、県外に移転していているとのこと。

しかし、農業や漁業といった、場所に縛られる、場所の制約のある職業をされている方々

や、不況下で簡単に仕事を得られないような方々は、原発が爆発したら移動するしかない、しかし、今すぐに移動できる実態ではない、ということで、腹をくくって生活している心情とのこと。

・国や政府は福島県民のことを本当に考えてくれているのか！との憤り

政争に明け暮れる与野党の様子に、福島の方々は怒っている。節電対応とはいえ、そこそこ冷房もきいていて、外もマスクなしで歩ける永田町や霞が関の方々に、「彼らこそが福島に来て長く住んでみてほしい。私たちの思いを何一つ理解してくれていない様子に、残念というより怒りがこみ上げてくる」とのことだ。

毎日、空をみつめ、風向きを気にしているという。福島第一原発からの放射能物質が飛散するのを気にしているのだ。国が決める避難区域や同心円状の避難区分けでは対処しきれない、風向きや地形によって異なる放射能汚染の実態や、思いがけず近くで出現してくるホットスポットの実態に、毎日気が気でないのだという。

・福島の旅館にて

今回の取材は、あえて、日帰りではなく、観光業としてもダメージを受けている地元の老舗旅館に1泊することにした。旅館でのちょっとした光景も、震災の影響を物語っている。

まず、旅館到着時、今回は車で現地入りしたが、駐車場にはずらっと他県ナンバーの警察車両が駐車されている。ここは警察の駐車場かと見間違えたが、その車のダッシュボードには、震災復興で応援部隊できている旨の札が置かれていた。

今回宿泊した旅館自体は、外見上は大きな損傷はない。しかし、旅館内部では、一部の壁にクラック(ひび割れ)があったり、修理中の箇所があったり、温泉の大浴場では、「浴槽にひび割れがあり、浴槽内の湯量が少なくなっている場合があります。」との張り紙があった。震災で揺れた際に、浴槽に損傷があったのだろう。

それ以外は、震災の苦境にあっても復興の一筋の光にも見える複数の団体さんの宴会があった。一見すると、中には、震災で大変な時に宴会やカラオケで盛り上がることを、自粛ムードの中でけしからん、という感情を抱かれる方々もいらっしゃるかもしれない。

しかし、本当の復興は、普段通り、観光地のにぎわいがあり、宴会で盛り上がるひとときがあり、町中に活気とさわやかな湯気が漂っている状態によってもたらされる。また、宴会中の方々も、もしかすると、どこにも怒りをぶつけきれないやるせなさを、宴会という夢のようなひとときで、ギリギリに張り詰めた心を開放してお互いに癒しあっているのかもしれない。そう思うと、にぎやかな宴会の騒ぎに、一抹の悲哀を感じてしまった。

・旅館内をジャージ姿で歩いている人が多いわけ・・・

この老舗旅館では、普通、館内は浴衣でぶらぶらする人であふれているのだが、今、や

や違和感のあるジャージ姿の人が多く、聞けば、県外から支援で来ている方々のようだ。

旅館のスタッフにインタビューしてみたが、震災復興支援の方々が10泊どころではなく、長期間にわたって滞在してくれてありがたい、とのことだ。確かに、通常の宿泊メニュー(和コースの夕食・朝食・浴衣の提供・部屋の掃除などのあるもの)ではなく、簡素化された復興支援向けの滞在メニューのため、総じて宿泊単価が低いのだが、風評被害で大打撃を受けている旅館の経営を支えてくれている面では、救世主のような「お客様」に違いない。

ベランダには旅館では普通は見かけない、洗濯物をたくさん干している様子が見受けられた。これも、長期滞在で復興支援にあたっている方々の部屋なのだろう。

・私も福島の人々と同じものを口にしよう・・・

現場主義を大切にしていきたい私としては、今回の福島での取材では、福島の方々と同じものを口にしようと思ってやってきた。普段、何気なく出される水も、こちらの方々は放射能汚染におびえながら飲んでいる。私も、同じ水を飲んだ。

旅館の夕食では、福島産の食材がならぶ。風評被害にあえぐ中、けなげに生産し続ける方々に頭が下がる思いがする。多くの福島産の食材は、これまで以上に希望の輝きをもっておいしくたくましい味がした。

懇親会などを除いては、普段はほとんど自らお酒を飲もうとしない私だが、福島の地酒も味わうこととした。いろいろな地酒がある中、「天明」という地酒を選んだ。福島に天の恵みが明るく降り注ぎますように、との思いを込めて、東日本大震災における全ての被災者様やご無念ながらに天上に召された尊い御霊に献杯することとした。非常においしく頂いた。

また、取材を終えた帰りには、福島名産の「ゆべし」というお菓子を買って帰っておいしく頂いた。まるでこの度の取材で出会った福島県の方々のように、飾り気でごまかさず素朴だが深い味わいのあるお菓子であった。

この取材の前月も、福島市で講演をしてきた際、福島名産の「あずき茶」と「あんぼ柿」を買って帰り、新幹線の車内でおいしく頂いていた。その際、「ゆべし」を買って帰るのを忘れていたため、今回、ちょうど、買って帰ることができて嬉しかったのだ。

・福島県民は人体実験の実験台ではない！との怒り

取材は2日目に入る。農家の方から発せられる生の声に耳を傾けた。どうやら、福島県では健康調査として血液検査などを行うとのこと。しかし、この農家の方は、「1滴たりとも俺の血液は抜かせない。俺たちは放射能汚染のデータを集める人体実験の実験台にはならない！」と怒り心頭であった。

確かに、自治体として住民の健康を最悪の状況下でも、その中でより良い状態を保とうとすることには、ある程度の意義はあろう。しかし、既に行政・政治は県民の信頼を完全に失い、必ずしも十分とは言い切れないままに検査をするということに、県民は怒っている。

るのだ。

希望を持てる見通し、あるいは、現状をありのままに伝えることによる信頼感がないままでは、住民にとって、行政・政治の論理的には妥当な対応であったとしても、これ以上は何も期待していないし、放射能汚染の安全性の問い合わせをしても、誰も責任をとりたがらないためか、あちこちの窓口対応(市は県に、また、県は国にたらいまわし、各相談窓口はあいまいに煙に巻く対応に終始するなど)は、県民の感情を逆なでする以外には何の目立った「功績」も上げていないようである。

・福島県民であるということ「お嫁にいけない」と悩む・・・

福島県のあるお宅の奥さんに聞いたところ、まわりの結婚適齢期の女性たちは、真剣に籍や住民票を県外に移すべきではないかと悩んでいるとのことだ。福島県に住んでいるというだけで、放射能汚染された「嫁」が生む子供は安心して育てられない、という心理が、これから伴侶となるであろう男性やそのご家族に、風評被害的に生じてくることを恐れているからだという。

愛する者同士は、それこそ、神父が結婚の誓いを立てさせる際に述べるように、富める時も病める時も互いに助け合うことを堅く信じ守り合うかもしれない。しかし、同じく、神父が結婚式の際に問いかけるように、「この者たちの結婚に異議のある者は申し出よ」というところで、新婦のお相手のご家族が明に暗に異議を申し出ているようなものなのだ。

私は未婚だが、もし、私が福島に住んでいて、たまたま県外の愛する女性と結ばれたいと強く命をかけて願ったとしても、風評被害的な嫌悪感を持たれてお相手のご家族に門前払いをくらったならばと考えると、あまりにも酷く悲しい思いにさいなまれるに違いない。

・行政やお偉い専門家より、何よりも、農家は土地を信じている

農家の方のお話しでは、作付けを行うかどうかの判断も国や自治体などの判断が遅すぎたり、二転三転してブレたりする中で、もはや、信用できるものはないという。そして、農家の方々の心情は、専門用語を振り回して現地の実態や農家の心情を慮ることない、賢いのだろうが人間として敬えぬ「知能指数の高いバカ」な人々には辟易している感がある。

そして、ある農家の方がおっしゃるには、農家は自分が耕して手をかけてきた土地でこれまで生活してきたのであって、その土地の全てを信頼し土地と共に作物の命も農家としてのご自身の命も育ててきたという。ご家族を養い共に歩んできた家族同然の土地を、簡単に見捨てて別の場所で農業をやれば良いという「論理的」なお話しでは割り切れない、という農家の方々の生の声・心の拠り所となる土地への信頼に触れることができた。

「別の場所で農業をやればいいじゃないか」という単純明快で論理的な主張は、農家の方々の実態を反映していないようである。そういったことや避難命令などは、農家の方々にとって、現代の「廃刀令」のようなものかもしれない。

武士の魂である刀を取り上げられることは、武士にとって、自らの存在・人格を全否定

されるかのようなものであるように、その土地ならではの気候と付き合いながら、農家の方々から何十年も代々受け継ぎ育て守ってきた土地は、農家の「血」であり「肉」であり、武士で言う「刀」である。

別の場所で同じ「農作業」をやれば良い、同じ「農作物」を産出すれば良い、というわけにはいかないのである。土地には農家の方々の魂・心の拠り所があり、単に同じような農作業を別の土地で行い、同じようにみえる「農作物」を農家の方々の魂が込められてきていない新たな土地で産出するということは、「魂の抜け殻となった農業」をやれということや、宗教で言えば「改宗しろ」というに等しいことは、あまりにも酷な精神的拷問のようなものなのかもしれない。

・絶望的な笑顔を見せながら話す姿

取材中、私からの質問に対し、時に朴訥に、また、時に怒りで堰を切って流れ出すように語られる中で、幾度となく心が締め付けられるような笑顔が垣間見られた。時に上を見つめ、時に肩を落として視線を下げながら、また、時に自嘲気味に、様々な複雑な笑顔を見せてくれた。

私を気遣ってくれているのか、それとも、自ら思うところあつてのことかは分からないが、苦境に直面してもなお心の底から振り絞る笑顔は、その表情・目で訴えかける力に、希望の光と輝きはなく、焦燥感を遥かに超えた絶望感や死を覚悟したがゆえの、ためらいではない痛々しいほどの「落ち着き」がもたらすものであるように感じられた。

実際、震災後には怒りがこみ上げどうにかしようと思っていたり、家族の間でもギスギスした緊張感が常に漂っていたりしたとのことだが、そこから、希望ではなくあきらめが心を覆うようになってはじめて、笑顔で話せるようになったという。

震災当初のしばらくは、安全性に関する新聞記事をスクラップブックに切り貼りし、テレビの報道を食い入るように見ながら、それらから少しでも希望の灯を見出そうと一生懸命だったという。

しかし、延々と先の見えない状況が続き、国や政府への失望が続く中、いつしか、新聞もテレビも見たくなくなって、希望を見出すことに疲れ果てたのだという。絶望し、あきらめてはじめて笑顔で話せるようになるという逆説的な実態が、建物の復旧復興だけでは解決できない「心の復興」に影を落としているようだ。

実際、文化財に指定されてもおかしくないほどで、皇室にゆかりのある修繕すれば生かせるある貴重な建物が、復旧復興の名の下に、さっさと解体された上、建て直しが検討されているという。震災の影響で、漏水が起り、柱や土台が朽ちかけてきていたそうだ。

あたかも、「復旧復興はとにかく被災して痛んだモノは取り壊し、新たに建て直せば良いのだ」と言わんばかりに、壊してはいけないものまで壊して仮設住宅をボンボン立てればそれでいいという、立派な「震災からの再建策」が進められていこうとしているようだ。

大切なのは、被災地の方々の生きる意味や生の声に耳を傾けつつ「どう復興するか」と

ということなのに、現在の復旧復興策は、往々にして、「何をいくらで建て直すか、設置するか」という無機質で機械的な「魂の抜け殻のコミュニティーづくり」になっているようだ。

・国家的な情報統制に悩む日々・・・

福島県産の牛肉から放射性物質が検出された問題で、福島県のある畜産に関わる方はこう言う。もっと早く、SPEEDI（スピーディ：緊急時迅速放射能影響予測システム）などで、放射性物質の拡散情報を国や自治体が包み隠さず提供してくれていれば、牛に食べさせる稲わらをブルーシートで覆っておいたり、安全な屋内にかくまっておけたりできたはずなのに…、と。

国や政府にとって都合の悪い情報は、必ずしも、農作物を作る農家や畜産農家にとって、都合の悪いものとは限らないようだ。むしろ、危険なら危険で、どうすればある程度は対応できるのかを明確に示してもらえれば、それなりに対応できる大切な情報が、国家的に隠され続けるという情報統制が大きな問題なのであろう。

ちなみに、私の指導している「内部統制」と、情報統制や物価統制や時に弾圧にまでエスカレートする「外部統制」とは全く異なる。内部統制は、私としては「内部自治」と置き換えてもらいたい思いがしているが、要するに、「健全に儲け続けるための仕組み」であり、「みんなで作ったルールをみんなで守り合う」ための仕組みである。一方の外部統制は、「国家」の都合の良い情報を流す一方で、「国家」にとって都合の悪い情報は隠ぺいしたり開示しなかったり、強制的に誰かを有無を言わせず従わせたりすることを指す。

この場合の「国家」に、誰が含まれ、誰が除外されるかは問題だろう。何の罪もなく、また、政治的に目ざわりとされる運動をしていたわけでもない方々が、この国家・政治を支える人民に含まれなかったというのが、今回の福島を中心とした情報統制の実態のようである。

ある方はこう嘆く。選挙の際はこんな片田舎まで政治家が回ってきたのに、震災後は政治家は誰も回ってこないし、お偉い学者さんも調査なんかにも来ていない、と。実際には、心あるごく一部の学者さんは、現場を回って調査をしているのだろうが、その活動や報告などの詳細が大きく取り上げられることもないためか、福島の方々にはある種の情報統制に安心感が生じ得ないのが実態である。

・「平成の大合併」がもたらした弊害

ある福島県の方は、このようなことも話してくれた。いわゆる「平成の大合併」による町村合併などで、その土地の成り立ちや危機情報を読みとれる地名（「～沼」や「～池」といった地名）が、洒落た地名やこれまでの歴史をリセットするような新たな地名になってしまったことで、危機意識や防災意識が薄れたのではないかと。

地名が変わることは、単に、長年その土地に住んでこられた方々の思いを損ねるだけでなく、危機管理上の問題にもなるのである。

実際、東京や千葉などで今回の震災により液状化被害を受けた地域やその周辺地域では、現代の精巧で便利な地図ではなく、古文書や古くからの地図の閲覧を求める方々が続々と各地の図書館を訪れている。

自分たちの住む土地の成り立ちや、これから移転する先や移転先候補地を探す上で、昔からの土地の成り立ちを知ることは、危機管理上の重要な対応である。埋立地であれば、他の土地より液状化被害が容易に想定されやすいであろうし、採石場などの堅い岩盤の土地であれば、埋立地より安全である可能性が読み取れるだろう。(ただし、ある採石地のように、どれだけ堅い岩盤があった土地でも、採石によって地下が空洞化しているところは危険であったりするので注意が必要であろう。)

・別の地域の原発10km圏内に立地する企業の方の声

震災後の間もない頃でこの取材より以前に、ある別の原発立地先の周辺企業に勤める方にインタビューしていた際の生の声は、目立った産業に乏しい各地の実態を反映した苦悩を示していた。

その人はこう言う。確かに、福島原発の及ぼした影響は大きなものがあり心配だが、それをもって原発廃止とは簡単には言い出せない。原発建設や稼働においては、地域社会に多大な利益や雇用を生み出し、ただでさえ雇用問題に悩む地元で、今回の福島の問題があったからといって原発を廃止すべきとは言いにくいし、もしそういう声をあげれば、仲間を含めた地元住民の強烈な反発を買うだろうなあ…、と。

原発と社会的問題とを考える際、単純に原発を廃止すべきとは即断で言いきれない実態が各地にあるようだ。社会的問題と言った場合、単に放射能汚染の問題だけではなく、地域の雇用や税収、国際的なエネルギー資源を基にしたパワーバランス、国防的側面などや、再生可能エネルギーやスマートグリッドなどが十分に普及・整備されていない中での電力需給の課題などを勘案すると、一気に脱原発とはいかず、様々な検討すべき課題・側面があるようだ。

現地の実態や生の声に、私のような者がかけられる慰めの言葉もみつからない中、震災直後に行った東北の被災地企業様への取材に続き、今回の取材でも生の実態に触れて、改めて、これからも何か少しでも復興支援に役立てるよう微力ながら力を尽くして行きたいとの思いを新たにしたい。

また、今回の取材は、被災者さまの生の声を基にお届けしたが、中立性をもって物事の判断にあたる上では、福島を取り巻く問題に関しても、国・自治体・政治家や、電力事業者の生の声にも耳を傾ける必要があるかもしれない。もし、感情的に誰かを責め立てたいような思いがわき起こってきたとしても、このような課題にも、思い込みやどちらかの立場だけに偏った情報発信に陥ることのないように、できるだけ務めていく必要もあるのだろうと思う次第だ。

日本マネジメント総合研究所 理事長 戸村智憲

早大卒。米国 MBA 修了。国連勤務にて、国連内部監査業務専門官、国連戦略立案専門官リーダー、国連主導の CSR 運動「国連グローバルコンパクト(UNGC)」広報・企業誘致などを担当。

民間企業役員として監査統括・人事総務統括、IT 企業 (株) アシスト顧問 (社長: ビル・トッテン)、経営行動科学学会理事・兼・東日本研究部会長、岡山大学大学院非常勤講師、JA 長野中央会顧問などを歴任。

代表的な著書に、震災後の緊急電子出版『危機管理・事業継続ガイド ～東日本大震災の教訓と復興への対応～』(税務経理協会)、『監査 MBA 講座 監査マネジメント技法: 危機管理・リスク管理と監査』(中央経済社)など、現在 17 冊。

テレビ・ラジオ各局でのコメンテーター出演、番組監修なども行う傍ら、産学共に実務・研究にも活動中。

震災 2 日目からの緊急連載や、震災復興支援フォーラムの主催なども務めた。

震災復興支援フォーラム: http://prw.kyodonews.jp/prwfile/release/M100396/201107127856/_prw_fl3_0NJ756Fa.pdf



HP: <http://www.jmri.jp/>

メール: info@jmri.jp

twitter: [@Tomonori_TOMURA](https://twitter.com/Tomonori_TOMURA)

ブログ: <http://blog.livedoor.jp/tomura777/>

フェイスブック、mixi などでも情報発信中。